

中国語版の『資本論』：翻訳を巡る微視的体験

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4494327>

出版情報：経済学研究. 63 (6), pp.41-46, 1997-08-31. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



〔資料〕

中国語版の『資本論』

——翻訳を巡る微視的体験——

福 留 久 大

1997年5月28日～6月10日の日程で中国再訪の機会が得られた。6月4日、北京人民大学内の新華書店で、『資本論』中国語版の新版が1975年に出版されていること、にもかかわらず筆者は、それ以前の旧版のみしか中国語版は存在しないかのように誤解していたことに気づかされた。この誤解に基づいて発表した二、三の誤報を訂正しなければならない義務が生じたと考える。

初回訪中と『資本論』

筆者の最初の中国大陸訪問は、1977年11月2日、東京を9時30分に飛びたって、14時05分に北京に到着する（中国時間では13時05分）というものだった。帰国は、11月16日、上海発大阪着、14泊15日の旅だった。11月7日に北京から武漢に、11月10日に武漢から長沙に、11月13日に長沙から上海に移動するという、九州・山口社会科学訪中団の団体旅行に加わったのである。

1976年1月に周恩来の死去、9月に毛沢東の死去があり、1977年7月に鄧小平の再復活があって、時期的には毛沢東時代から鄧小平時代への転換期にあたっていた。転換期とは言え、それは後の時期からの回顧において把握されることであって、1977年秋の実感においては、社会風俗には、転換の兆しは極めて希薄であった。女性でも、上衣とズボンという形が貫徹していたし、化粧した女性には唯の一人も会えなかった。スカート着用で化粧している人に、長沙から杭州を経て上海へ移動する途中で出会ったと思ったところ、それは、映画監督木下恵介・松山善三氏とともに訪中中の女優吉永小百合女史であった。

そういう旅行の2日目、11月3日の夜、北京市都心の王府井大街（ワンフーチンターチエ）にある新華書店と一緒に出かける旅程が組まれていた。さらに旅行の10日目、11月11日の午前中には長沙の新華書店行きも予定されていた。当時、中国のこれらの書店にあっては馬克思・恩格斯著作集、毛沢東著作集は、常備品だったと言って良い。

筆者が、これらの書店で求めたのは、亜当斯密著、

郭大力・王亜南訳『国民財富の性質と原因の研究』上巻、大衛李嘉図著、郭大力・王亜南訳『政治経済学及賦税原理』、西斯蒙第著、何欽訳『政治経済学新原理』などであって、馬克思『資本論』第1巻は含まれていなかった。

この1977年晩秋の中国旅行で中国語版『資本論』第1巻を求めなかったことは、後述の通り、筆者の誤解の源となつたのであり、失敗だったのであるが、しかし、この旅で中国語版『資本論』第1巻を購入する必要を、当時の筆者は、全く感じていなかった。この旅の同行者でもあった横田耕一氏（憲法学専攻。当時九州大学教養部、現在大学院比較社会文化研究科）が、2年ほど前の1975年夏の訪中時に、中国語版『資本論』第1巻を買い求めて下さっていたからである。この時の、郭大力・王亜南訳『資本論』第1巻（人民出版社発行、1953年3月第1版、1963年12月第2版、1975年3月北京第13次印刷）がいわば旧版であり、間もなく、中共中央馬克思・恩格斯・列宁・斯大林著作編訳局訳『資本論』第1巻（人民出版社発行、1975年6月第1版）が新版として出版され、誤訳についても訂正の筆が加えられたという事情には、思いも及ばなかった。

「頬」と「背」の錯誤

郭大力・王亜南訳『資本論』の或る誤訳に気づいたのは、1979年3月頃のことである。最初の訪中から、2年余りが経過していた。『資本論』第1巻第24章「いわゆる原始的蓄積」第3節「15世紀末以降の被収奪者に対する血の立法、労賃引下げのための諸法律」のなかで、1547年のエドワード6世治世第1年の法規に関して、正しくは「頬」と訳出されるべき語が「背」と誤訳されているのであった。

ドイツ語原文は次の通りである。

Wenn sich der Sklave für 14 Tage entfernt, ist er zur Sklaverei auf Lebenszeit verurteilt und soll auf Stirn oder Backen mit dem Buchstaben

S gebrandmarkt, wenn er zum drittenmal fortläuft, als Staatsverräter hingerichtet werden.

(Kapitel 24, Die sogenannte ursprüngliche Akkumulation. Sektion 3, Blutgesetzgebung gegen die Expropriierten seit Ende des 15. Jahrhunderts.)

対応する日本語訳。

「奴隷は、14日間仕事を離れれば終身奴隷の宣告を受けて、額か頬にS字を烙印され、逃亡3回目には国に対する反逆者として死刑に処される。」

対応する部分の郭大力・王亜南訳。

「要是奴隷逃亡到十四天、他就要被判決為終身奴隷、在額上或背上、打上S的烙印。如果三度逃亡、就要当作叛逆实行处決。」(第二十四章、所謂原始積累。III, 15世紀末葉以來对被剝奪者的血腥的立法。压下工資的法律。)(簡体字は通常の漢字に改めた。簡体字による表現は後掲の図1参照。)

ドイツ語原文で<auf Stirn oder Backen>部分、日本語に移すと「額か頬に」となる部分が、郭大力・王亜南訳では「在額上或背上」となっていて、「頬」が「背」に誤り訳されていたのである。

この中国語版の誤訳は、しかし、単独行ではなかった。最も古いのは、そして諸版の誤訳の発生源になったと考えられるのは1887年の英語版『資本論』である。そこでは、ドイツ語<Backen>「頬」が英語<back>「背」に、その語形の類似性に基づく錯覚から誤訳されている。この英語版は、サミュエル・ムーアとエドワード・イーヴリング(Samuel Moore and Edward Aveling)の共訳となっているが、エンゲルスの英語版序言によると、「いわゆる原始的蓄積」は、イーヴリングの担当部分に含まれている。その誤訳を含む当該部分は、次のようになっている。

If the slave is absent a fortnight, he is condemned to slavery for life and is to be branded on forehead or back with the letter S; if he runs away thrice, he is to be executed as a felon.

(PART VIII. The So-Called Primitive Accumulation. CHAPTER XXVIII. Bloody Legislation Against The Expropriated, From The End of The 15th Century. Forcing Down of Wages by Acts of Parliament.)

この1887年英語版の「頬」から「背」への誤りが、その後の英語版に引き継がれたし、日本語版でも、高島素之、長谷部文雄、向坂逸郎、岡崎次郎、宮川実の各氏の訳書に「頬」であるべき所が「背」と誤り訳されてきたのである。

大略、以上のような「小発見」を、筆者は、「マルクスは頬と訳した」(『社会科学の方法』1979年10月号、御茶の水書房刊)として報告した。そこでは、「漢訳では、郭大力・王亜南共訳で「在額上或背上、打上S的烙印」と「腮」(Backen)を「背」(Rücken)に誤訳」と記している。¹⁾

先入観による調査不足

1982年春に矢吹晋の「中国における『資本論』翻訳史」(『UP』1982年3月号、東京大学出版会刊)に接することができた。それによって、郭大力(1905~1976年)、王亜南(1901~1969年)という両訳者の生年没年に関する情報、「彼らはドイツ語校正版を底本にし、英訳と日訳を参照して訳出した。全3巻本は1938年8~9月に上海読書生活出版社から出された」という事情を知ることができた。²⁾

この矢吹氏の論稿を注意深く読むと、次のような形で、郭大力・王亜南共訳本に対する新版の存在が示されている。「マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン著作編訳局の『マルクスエンゲルス全集』においては、『資本論』は第23~26巻に全4巻6冊として収められている(すなわち『剰余価値学説史』を第26巻に3分冊として所収)。これらは1972~75年に人民出版社から各巻13万冊ずつ発行された。編訳局の『資本論』中訳本はドイツ語版を底本とし、ロシア語版を参照し、また郭大力、王亜南の共訳本を参考にしている。」³⁾

この中国語版の訳者が単数ないし複数の個人名で示されていたならば、筆者も新版という認識をもち得たことだろう。しかし、「編訳局の『資本論』」という表記は、そういう認識へ導き難かった。日本の例で言えば、大月書店刊行の『マルクス・エンゲル全集』に入っていた『資本論』が、形式上は「全集編集委員会訳」となっているが、実質においては「岡崎次郎訳」である。その例と同一の類型を想定してしまったのである。矢吹氏の論稿には、『剰余価値学説史』について、次の

- 1) 福留久大「マルクスは頬と訳した」(御茶の水書房『社会科学の方法』124号、1979年10月)8頁。
- 2) 矢吹 晋「中国における『資本論』翻訳史」(東京大学出版会『UP』113号、1982年3月)37頁。
- 3) 矢吹、同前、38頁。

ような記述も含まれていた。『『資本論』第4巻たる『剰余価値学説史』は郭大力が1940年から43年にかけて訳出し、1949年6月、三聯書店から出版され、1957年7月までに第5次まで重印された。1957年10月には訳者の校訂本が出た」⁴⁾。この記述に基づいて、郭大力・王亜南共訳の『資本論』が全集23～25巻に、郭大力訳『剰余価値学説史』が第26巻に収録されたのであろうと誤解したのである。

1983年春から夏にかけて、筆者は『『資本論』翻訳の一齣』（『経済学研究』第48巻第3・4号、九州大学経済学会刊）を執筆した⁵⁾。そのとき筆者は、中国語版については、上のような誤解の下にあった。フランス語版、オランダ語版、ロシア語版、ポルトガル語版、スペイン語版、イタリア語版、チェコ語版、ポーランド語版、セルボクロアチア語版、ハンガリー語版については、可能な限り新しい版で確かめながら、中国語版については、その努力を怠っていた。

「額か頬に」の部分について、オランダ語版、ロシア語版、スペイン語、イタリア語版、チェコ語版、ポーランド語版、セルボクロアチア語版、ハンガリー語版は正訳、フランス語版は「頬と額に」と正誤半々、ポルトガル語版は「額と背に」と二重の誤り、という報告に加えて、「英語版・中国語版が誤りを犯している」という旧来の認識をそのまま書き記していた⁶⁾。先入見に囚われて、新しい中国語版の存在には全然思いが及ばなかったのである。恥かしい限りである。

因みに、日本語版については、ようやく1983年5月発行の資本論翻訳委員会訳『資本論』第4分冊（新日本出版社刊）において「額か頬にS字の烙印を押され」と正されていた。

それから相当の年数を経た後のことだが、韓国からの留学生崔東術氏に、『資本論』のハングル版の存在を知らされた。同僚の深川博史氏の訪韓の折に購求を依頼して、二種類のハングル版『資本論』を入手することができた。1987年刊の김영민訳と、1989年刊の金秀行訳である。「額か頬に」の個所を見ると、前者では「이마(イマ・額)와(ワ・と)등(トゥン・背)에(エ・に)」となっており、「と」と「背」の二個の誤訳が生

じている。後者では「이마(イマ・額)나(ナ・か)등(トゥン・背)에(エ・に)」で、誤訳は「背」のみである（「マルクスと知らぬが仏」）⁷⁾。

時を同じくして、中国からの留学生も、増加の勢いにあった。にもかかわらず、韓国人学生に対してハングル版『資本論』の情報を求めたのとは対照的に、中国人学生に対しては、中国語版『資本論』の情報を求めることをしなかった。筆者にとって、郭大力・王亜南訳『資本論』の存在が、それほど大きかったのである。中国語版『資本論』と言えば、すなわち郭大力・王亜南訳『資本論』という先入見に支配されて、調査の手を進める必要を感じないままに、時を過したことになる。先出の矢吹晋「中国における『資本論』翻訳史」で言及されている中国語版馬克思恩格斯全集が、経済学部図書室に所蔵されていたのに、その第23～25巻にあたる『資本論』に手を伸ばさなかったのである。『資本論』第1巻にあたる馬克思恩格斯全集第23巻は、人民出版社出版、新華書店発行、北京新華印刷厂印刷、1972年9月第1版、1972年9月北京第1次印刷の書物が1976年中に図書室に受入れられていたのである。それを調査しなかったことが、幾重にも悔まれるわけである。

台湾訪問と『資本論』

1993年9月22日～28日の日程で台湾訪問の機会が得られた。羽田空港に集合して訪問団が結成されると、池田知久氏（中国哲学専攻。東京大学大学院人文社会系研究科）が、そこにいた。大学生時代、東京郊外の学生寮で、しばらく生活を共にして以来、30年ぶりの再会であった。この短期訪問に先だって、池田氏は台湾で長期講義を担当した経験があって、台北の書店事情にも通じていた。その彼が言うのに、近年台湾で『資本論』の中国語版が刊行されて、大きな書店なら販売されているのが通例だとの由。

9月26日夕刻、昼間の日程を消化した後、池田氏に同行した重慶南路の書店で、小豆色に彩られた瀟洒な感じの台北版の『資本論』全3巻に出会うことができた。1990年刊の呉家驊訳である。今にして思えば、馬克思・恩格斯著『資本論』と表紙に著者として、マルクスに加えてエンゲルスが並んでいる点など、不正確な面が存在するのではあるが、新しい中国語版を手にした筆者は、何よりも先に第24章第3節の「額か頬に」の個所に眼を走らせた。嬉しいことに、郭大力・王亜南訳の誤訳は訂正されている。

4) 矢吹，同前，38頁。

5) 福留久大「『資本論』翻訳の一齣」（九州大学経済学会『経済学研究』第48巻第3・4合併号，1983年7月）151－8頁。

6) 福留，同前，157頁。

7) 福留久大「マルクスと知らぬが仏」（大学出版部協会『大学出版』29号，1996年春季）4－5頁。

「如果奴隸逃亡達14天、就要判為終身奴隸、並在額頭或臉頰打上S字樣的烙印、如果第三次逃亡、就要當作叛國犯處死。」

(第二十四章, 所謂原始積累。

3. 十五世紀末以來懲治被剝奪者的血腥立法。壓低工資的法律。)

原著・馬克思／恩格斯

譯者・吳家駒

出版社・時報文化出版企業有限公司

初版一刷・1990年9月1日

初版三刷・1992年9月10日。

この台北版『資本論』において「額か頬に」の部分「並在額頭或臉頰」と修正されているということは、とりあえず表面的な意味で正確である。しかし、後述のように厳密な意では正確ではない。しかし、表面的な意味しか把握し得なかった筆者は、次のような誤りを含んだ報告を行なったのである。

「台北版の『資本論』……。問題の箇所を一瞥、烙印を押す場所は「並在額頭或臉頰」(on forehead or cheek)と正しく訳されている。前記のように1953年刊の郭大力・王亜南訳の北京版が「在額上或背上」(on forehead or back)と誤っているのと対照的である。」「同窓会での5分間卓話を求められた。1994年10月12日、マルクス研究の盛んなはずの北京の版に誤訳が生き続け、マルクス研究に反親和的と考えられる台北の版に正訳が見られる事を話した。」⁸⁾

中国再訪と『資本論』

冒頭に記した通り、20年ぶりに1997年5月28日～6月10日の日程で、中国再訪の機会が与えられた。主要目的は、中国人民大学で3時間単位で8回の集中講義を行うことだった。と同時に、鄧小平時代の「改革・開放」の20年を経過した中国での『資本論』を巡る事情について何かを知り得ることをも、副次的目的と考えていた。結果的には「逆転」があったのであるが、北京滞在数日の間に、この副次的目的についてはほとんど期待できないだろうという感じをもつに至った。5月28日水曜日に北京に到着、6月1日日曜日に、人民大学経済学系の程華女史の案内で、北京の各大学出版会やその他の出版社が共同で出店している図書城を訪れた。20年前スカート着用は皆無に近かったのが、今回は、逆に女性はほぼ全員スカート着用にな

8) 福留, 同前, 5頁。

図1 北京旧版より⁹⁾

第二十四章 所謂原始積累

811

或社会的敌人判处死刑。

愛德華六世即位第一年(1547年)制定的一个法律規定: 拒絕劳动的人, 只要被人告发为游手好閑, 就要被罰充当告发人的奴隶。主人可以用面包和水, 稀薄的飲料和他认为适宜的殘肉去豢养奴隶。他有权用鞭子或鎖鍊, 强迫奴隶从事劳动, 而不管那种劳动对他說来是多么令人厌恶。要是奴隶逃亡到十四天, 他就要被判決为終身奴隶, 在額上或背上, 打上S的烙印。如果三度逃亡, 就要当作叛逆实行处决。主人可以把他出卖, 贈与, 或作为奴隶而租賃, 像别的动产和家畜一样。如果奴隶企图反抗, 主人也就可以把他判处极刑。治安法官根据报告, 可以对这种犯人进行搜索。一个浪人只要被发现某地已有三天无所事事, 他就要被送回原籍, 用燒紅的烙铁, 在胸前打上V的烙印, 用鎖鍊繫着, 在街道或他处服役。如果浪人謊报原籍, 他就要被罰充当該地居民或該地公会的終身奴隶, 并打上S的烙印。任誰都有权从浪人那里取去他們的子女作为学徒, 男的一直到二十四岁, 女的一直到二十岁。如果他們逃亡, 就要变为师傅的奴隶, 一直到达到这个年龄的时候为止。师傅可以任意枷鎖他們, 鞭打他們。为了易于識別, 并且有更好的保证起見, 任何一个师傅都可以在奴隶額上, 腕上或腿上, 带上一个铁环²²¹。这个法律的最終部分还規定, 某些貧民只要有什麼地方什麼人願給他們飲食, 給他們工作, 他們就应当听那个地方那个人使喚。这种教区奴隶, 在“流浪人”的名称下, 深入到19世紀, 还在英国保存下来。

221 《工商业論》(1770年)的著者說: “英国人在愛德華六世治下, 事实上似乎已經十分認真地獎勵手工制造业和使用貧民了。这一点可以由当时‘一切浪人應該打上烙印’这一条值得注意的法律看到。”(前书第8頁)

っていた。この風俗の大転換は、書店にも顕著だった。20年前は書店の棚に常に備えられていた馬克思・恩格斯著作集、毛沢東著作集が、今回は図書城の書店で全く眼に止まらなかった。20年経過して、あるいは新しい版ができたかも知れないと、かすかに期待していた中国語版『資本論』は、影も形も見えなかった。関係者の話を総合すると、「政治経済学」の題目で『資本論』の梗概は教授されるが、原典にさかのぼって検討されることはないの、書店で『資本論』が求められることも、したがって、書店の棚に『資本論』が並ぶことも、今はなくなったと推測される。

程華女史は、大学内の書店にも同様に『資本論』はないだろう、と話した。そのために、ほとんど期待を抱かずに、6月4日水曜日、ようやく人民大学の構内の地理にも慣れた筆者は、構内の一隅にある新華書店

9) 図1, 郭大力・王亜南訳『資本論』第1巻(人民出版社, 1953年第1版, 1963年第2版, 1975年3月刊) 811頁。

図2 北京新版より¹⁰⁾

成了乞丐、盜賊、流浪者，其中一部分人是由於習性，但大多數是為環境所迫。因此，十五世紀末和整個十六世紀，整個西歐都頒布了懲治流浪者的血腥法律。現在的工人階級的祖先，當初曾因被迫變成了流浪者和貧民而受到懲罰。法律把他們看作「自願的」罪犯，其依據是：只要他們願意，是可以繼續在已經不存在的舊的條件下勞動的。

在英國，這種立法是在亨利七世時期開始的。

亨利八世時期，1530年，允許年老和無勞動能力的乞丐行乞。但對身強力壯的流浪者則加以鞭打和監禁。他們要被綁在馬車後面，被鞭打到遍體流血為止，然後要發誓回到原籍或最近三年所居住的地方去「從事勞動」。多麼殘酷的諷刺！亨利八世二十七年，又重申了以前的法令，但由於加上了新的條款而更嚴厲了。如果在流浪時第二次被捕，就要再受鞭打並被割去半只耳朵；如果第三次被捕，就要被當作重罪犯和社會的敵人處死。

愛德華六世在他即位的第一年（1547年）頒布的法令規定，拒絕勞動的人，如被告發為游惰者，就要判為被告者的奴隸。主人應當用麵包和水，用稀湯和他認為適當的肉屑給自己的奴隸吃。他有权用鞭打和鐐銬強迫奴隸從事一切令人厭惡的勞動。如果奴隸逃亡達14天，就要判為終身奴隸，並在額頭或臉頰打上S字樣的烙印，如果第三次逃亡，就要當作叛國犯處死。主人可以把他出賣，遺贈，作為奴隸出租，完全象對待其他動產和牲畜一樣。如果奴隸圖謀反抗主人，也要被處死。治安法官必須根據報告搜捕逃亡的奴隸。如果發現流浪者3天無所事事，就要把他送回原籍，用燒紅的鐵器在他胸前打上V字樣的烙印，套上鎖鏈在街道上服役或服其他勞役。如果流浪者謊報籍貫，就要被罰充當該地、該地居民

図3 台灣版より¹¹⁾

成了乞丐、盜賊、流浪者，其中一部分人是由於習性，但大多數是為環境所迫。因此，十五世紀末和整個十六世紀，整個西歐都頒布了懲治流浪者的血腥法律。現在的工人階級的祖先，當初曾因被迫變成了流浪者和貧民而受到懲罰。法律把他們看作「自願的」罪犯，其依據是：只要他們願意，是可以繼續在已經不存在的舊的條件下勞動的。

在英國，這種立法是在亨利七世時期開始的。

亨利八世時期，1530年，允許年老和無勞動能力的乞丐行乞。但對身強力壯的流浪者則加以鞭打和監禁。他們要被綁在馬車後面，被鞭打到遍體流血為止，然後要發誓回到原籍或最近三年所居住的地方去「從事勞動」。多麼殘酷的諷刺！亨利八世二十七年，又重申了以前的法令，但由於加上了新的條款而更嚴厲了。如果在流浪時第二次被捕，就要再受鞭打並被割去半隻耳朵；如果第三次被捕，就要被當作重罪犯和社會的敵人處死。

愛德華六世在他即位的第一年（1547年）頒布的法令規定，拒絕勞動的人，如被告發為游惰者，就要判為被告者的奴隸。主人應當用麵包和水，用稀湯和他認為適當的肉屑給自己的奴隸吃。他有权用鞭打和鐐銬強迫奴隸從事一切令人厭惡的勞動。如果奴隸逃亡達14天，就要判為終身奴隸，並在額頭或臉頰打上S字樣的烙印，如果第三次逃亡，就要當作叛國犯處死。主人可以把他出賣，遺贈，作為奴隸出租，完全象對待其他動產和牲畜一樣。如果奴隸圖謀反抗主人，也要被處死。治安法官必須根據報告搜捕逃亡的奴隸。如果發現流浪者3天無所事事，就要把他送回原籍，用燒紅的鐵器在他胸前打上V字樣的烙印，套上鎖鏈在街道上服役或服其他勞役。如果流浪者謊報籍貫，就要被罰充當該地、該地居民

に入った。「社会科学」の棚に『資本論』第1巻が1冊、第2巻と第3巻は2冊ずつ並んでいる。第1巻の「額か頬に」の箇所を見ると、「並在額頭或臉頰」と訂正されている。表紙に戻って訳者を確かめると、「中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局訳」に改められている。次に、奥付を見て、筆者は、20年前の初回訪中に際して『資本論』第1巻を購入しなかったことの失敗を悟ることになった。「1975年6月第1版、1994年7月北京第7次印刷」と記されている。筆者の初回訪中時、つまり1977年11月には、既に刊行されていたわけである。その際に『資本論』を求めていたならば、前出のような誤った報告を口頭で、あるいは文章で公けにすることは無かったはずである。該当する箇所を抜粋すると、次の通りになる。

「如果奴隸逃亡達14天、就要判為終身奴隸、並在額頭或臉頰打上S字樣的烙印、如果第三次逃亡、就要當作叛國犯處死。」

（第二十四章、所謂原始積累。

3. 十五世紀末以來懲治被剝奪者的血腥立法。压低工資的法律。）

原著・馬克思

訳者・中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局

発行・人民出版社

1975年6月第1版

1994年7月北京第7次印刷。

気付くのが余りに遅くなって中国版の新訳関係者に對しては申訳ない限りではあるが、1975年刊の新版の

10) 図2，中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局訳『資本論』第1巻（人民出版社，1975年6月第1版，1994年刊）803頁。

11) 図3，吳家駟訳『資本論』第1巻（時報文化出版企業有限公司，1990年初版，1992年刊）803頁。

中国語版『資本論』第1巻を抱えて、福岡に帰ってみると、思いもかけない事情が、いまひとつ待ち受けていた。その事情に関して細かい説明は必要ないであろう。「額か頬に」の文章が登場する頁を一瞥するだけで、一目瞭然となるはずである。図1は、北京旧版というべき郭大力・王亜南訳書（1953年初版）の該当頁であり、図2は、北京新版にあたる中共中央編訳局訳書（1975年初版）のそれである。さらに、図3は、台北版の吳家駟訳書（1990年初版）の該当頁である。

図1と図2との比較によって、北京新版が旧版に大幅な改訳の手を加えていることが、明らかになる。

図2と図3との比較によって、台北版が北京新版の再生産物に外ならないことを知り得る。北京新版における簡体字を、台北版は繁体字に改めただけが、相異点である。それを除くと、頁数も文字の配列も、同一である。それでいて、「訳者・吳家駟」による新訳の形

式をとっているのは、何故なのだろうか。

北京新版は、翻訳典拠について、奥付に次のように記している。「本巻根拠《馬克思恩格斯全集》德文版第二十三卷並参照俄文版訳出。在翻訳過程中参考了《資本論》第一卷郭大力、王亜南中訳本」。台北版の奥付には、こうある。「本巻根拠《馬克思恩格斯全集》德文版第二十三卷並参照俄文版訳出。在翻訳過程中参考了《資本論》第一卷郭大力、王亜南中訳本」。すなわち、台北版は、簡体字を繁体字に移しただけで、内実においては、北京新版を忠実に複写したにすぎないものである。北京新版を発行している「人民出版社」と、台北版を出版した「時報文化出版企業有限公司」との間に合意が成立しているのか。そういう合意を欠いたままに、後者が前者の海賊版を作成しているのか。目下のところ、筆者は判断材料を持っていない。（1997・6・24）